

1933年（昭和8年 辰雄 29歳）

小池辰雄書簡（許嫁者への手紙）

（宛先） 世田谷区深沢町 伊藤順子様

1933年5月11日

小池辰雄

愛する順子様

あなたと二人の時を有つことは何と楽しいでしょう。夕映の空を見やりながら、私が雷死したら御身は殉死すると云うまでに二人の愛が堅く結ばれているのを、お互いは殉死の可否ではなく、二人の愛の不滅にありました。それでアーメンでした。私は雷死しませんよ、安心して下さい。あなたも殉死しないで下さい。み旨のまにまに！（勿論あの時、二人は何も深い意味で言ったわけではありませんが、その背後を考えれば以上の如くであると思います）。

楽しい勉強が終わって、お母様の備えて下さったフルーツをいただいて、その次に来るものは何でしたか。胸の中のあつき想い、……無我の境……聖前に於ける沈黙……言なきいのりの心……

pure kiss!……Thou and I said each other "Till we marry! We shall endure!"

「汝と我は互いに言った「我らは結婚するまで我慢しよう」と」……

順子さんよ！

We shall endure in Him! Only by Him!

「我らは彼の中で我慢しよう！ ただ彼によつて！」

どうかあなたも祈って助けて下さいね。この一事をよくendure「我慢」するならば神様のお喜びは大きいでしょう。その期来らばどんなにも……。しかしどこまでも我々の目的はそこにはありませんね。弱さをいつわることなく、ただくれた心で十字架にすがり、彼を仰ぎていかにもしてみ名のため傷つきてこの世の旅を終えたいことのみ。順子さん！あなたのHeart「心」と私のHeartのembrace「抱擁」をしてきよく、あつく、強く不滅なものであらしめよ。これこそは、肉体的のいかなる結合よりも強烈のものであり、不動のものであり、一切の苦しみを越えしめるものであります。そしてこの心と心との抱擁はただキリストとキリスト教会との貞潔の真理のみが教えるところ、聖霊のみが我らにその力を与えるもの。かくして今、私はあなたと離れて生活するとも肉体的のことも打ち越え、生も死も越えて、この世にありながら永遠の国にあって、あなたと一つであることを実感し得て平安であります。愛する者よ、み名を讃えん。我らの愛をくだくもの一つもなければ！（お母様に心からのよろしくを）。

名月の下、新町を辞したのは10時半。帰り来る我が心には無限の祈りあり。わが周囲の



友人らのため、先輩のため、先生のため、また親しき人々のため。何かは知らねど我をとらえる無限の祈りあり。聖霊のいい難きいのりとはただ個人的経験の苦しさの余り祈れないときばかりではなく、本当に羔の来り給うを待つ魂をとらえるものであると感じます。

敏夫君のために、私とあなたとから卒業の祝いのしるしに彼が記念のものを買い求めらるべく、5円を贈ろうと思うがいかに。勿論、私が全額をはらいます。来週の水曜に御相談しましょう。

では来るべき水曜を楽しみに。御元気で。

神我らを試み給う。荒野に勝ち給いし主にありて我らもまた勝たん！ 主よ、弱きをあわれみ給え。汝の力、我らと共に。我ら泣くとも汝の勝利必ず我らを平安と歓喜に移し給わん。アーメン。

My eternal only Beloved! My all!

〔私の永遠にただ一人の最愛の人！ 私のすべて！〕

順子様

1933年5月11日 夜

Thy truly 辰雄

〔編者註：「1930年、内村・藤井両巨星が天界に昇ったあと、三年間私は独りで日曜を遵っていた。その三年目なる1933年の12月23日に藤井武先生の親友塚本虎二先生の司式で伊藤順子と結婚した。」（著作集第9巻『感想と紀行』第五章「人物回想」、五「塚本虎二先生」より）

